



金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（下）：
猪飼野の風景と民衆

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅見, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002588

金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（下）

— 猪飼野の風景と民衆 —

浅 見 洋 子

言語文化学研究（日本語日本文学編）

2012・3 第7号抜刷

大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

金時鐘・幻の第三詩集 『日本風土記Ⅱ』論（下）

猪飼野の風景と民衆

浅見洋子

◆金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（上）

—記憶を語ることの歴史性—

第一章 よみがえる記憶

はじめに

一 三つの〈種族検定〉 — 「種族検定」

二 〈死〉から〈再生〉へ — 「わが性わが命」

三 〈遅配〉された手紙 — 「究めえない距離の深さで」

おわりに

（以上、『百舌鳥国文』第三三号／

二〇一二年三月刊行予定）

第二章 空想と変革

はじめに

◆金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（下）

—猪飼野の風景と民衆—

第二章 空想と変革

『日本風土記Ⅱ』は、一九六〇年代初頭に金時鐘の第三詩集として計画されながらも出版間際になってそれが頓挫し、原稿も四散

してしまった幻の未刊行詩集である。この詩集は、金時鐘が共和国の朝鮮作家同盟及び、当時所属していた左派在日朝鮮人運動組織から厳しい政治的批判を受け、一時は一切の表現活動から遠ざからなければならなかった状況のなかで、長く闇に葬られてきた。

『日本風土記Ⅱ』の存在が知られるようになったのは、『集成詩集原野の詩 1955～1988』（立風書房／一九九一年一月）

が出版された際である。『原野の詩』の「あとがき」で金時鐘がその存在を明かし、「金時鐘年譜」（野口豊子編）では、金時鐘の手許に唯一残されていた「目次の控え」が公開されたのである。さらに『原野の詩』では、その時点で判明していた七篇の詩が、その後には書かれた四篇とともに「拾遺集」として編み直されている。また宇野田尚哉と筆者が「目次の控え」を手がかりに、それぞれの初出誌にあたるという詩集の復元作業を進めてきた。今、『日本風土記Ⅱ』は徐々にその全体像をあらわしつつある。¹⁾

「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（上）——記憶を語ることの歴史性——」（以下、（上）と記す）及び本稿の目的は、今まさに復元されつつある『日本風土記Ⅱ』の読解を通して、『日本風土記Ⅱ』を金時鐘の作品史に位置づけることにある。二部立てという詩集の構成やタイトルに着目すると、『日本風土記Ⅱ』は第二詩集『日本風土記』（国文社／一九五七年一月）の続編としての

色彩が強く感じられる。だが、実際に『日本風土記Ⅱ』を読んでもみると、事実上の第三詩集『長篇詩集 新潟』（構造社／一九七〇年八月）と、多くの点で連動していることに気づかされるのである。²⁾ 未刊行詩集『日本風土記Ⅱ』をどう読み、位置づけるかという課題は、これまで研究されてきた既刊の詩集の分析を、今後進めていくにあたって重要であろう。

（上）では、金時鐘自身の体験をもとに書かれた数篇の詩を分析し、詩という形で投げかけられた記憶が帯びる歴史性について、その位置づけを試みた。これに対し本稿では、猪飼野を中心とする在日朝鮮人の生活を描いた、民衆史的な一面を持ついくつかの詩篇について考察する。彼ら彼女らが、地を這うような暮らしのなかで思い描いた豊かな空想をとらえることで、金時鐘が想像／創造しようとした未来像がいかなるものであったのかについて考えたい。

一 ふたつの「道」——「道（洪じいさん）」

『日本風土記Ⅱ』の結びには、共和国への帰国をモチーフにした「道（洪じいさん）」と「檻を捨て！」³⁾が置かれている。次の引用は、「道（洪じいさん）」の全文である。

大阪へは／ 三十年ぶりだかな。／ 反り気味に／ 家
のんだら坂を下りたのが夜明けがたの五時で／ 県本部ま
での道のりを／六度も休まにやならなかった／という洪（ホ
ン）おじいさん／ どうも／時間を食いおるだでなあ。／
右膝に乗せた足首が／超満員の車内であろうじて安定度を保
っているとき／この奈良県本部仕立ての貸切バスはもう最後
の横ぶれを／直線コースに立てなおしていた。／ こゝら辺
の土管やったで…／ いちよう並木を縫って／初夏は大きな
隈どりを御堂筋に投げていた。／もがれた足の／ 親指と
／ 中指と／ 小指とが／埋めてあるというアスファル
トを車は山出しの猪（イノシシ）さながら／ 帰国者大会
への／ 距離をちぢめて／ 一目散

（「道（洪じいさん）」）

これは、一九五九年六月二三日の『読売新聞（大阪版）』に発表された詩である。同年一二月から開始されることになる共和国への帰国事業を背景に組まれた特集、「帰国を待つ朝鮮の若人」の一環として掲載されたものだ。この詩には、おそらく編集部が書き記したと思われる、次のような無記名の評が併載されている。

洪じいさんは三十年前御堂筋の工事に土工として働いた。ある日足の指三本を切断する大ケガをした。その指はアスファルトの下に埋められている。いまその上をバスが走っている。じいさんの胸にぐっと熱いものがこみあげてきた。そしてこの道は帰国者大会から北朝鮮までつづいている。長年住みなれた日本をさる老人のかんがいを歌った詩だ。

「……この道は帰国者大会から北朝鮮までつづいている。／長年住みなれた日本をさる老人のかんがいを歌った詩だ」というこの評は、帰国事業で盛り上がりを見させていた当時の零気のかで書かれたことを踏まえれば、極めて自然な解釈であるといえるのかもしれない。⁴ テッサ・モリス・スズキの丹念な調査が指摘するように、冷戦下における共和国・日本・アメリカ・ソ連・中国、そして赤十字の様々な思惑が絡み合うなかで、在日朝鮮人の帰国への物語が喧伝されていたからだ。⁵ だが、そのような文脈でこの詩を読み過ごすことは、金時鐘の意図をとりこぼすことになりはしないだろうか。この詩は、単に「かんがいを歌った詩」などではないし、この「道」が「帰国者大会から北朝鮮までつづいている」わけでもない。注目すべきは、詩のなかに周到に描きこまれたふたつの対照的な「道」なのだ。

「洪じいさん」が従事した「御堂筋」の工事とは、大阪初の地下鉄となる、地下鉄御堂筋線の工事であると推定される。⁽⁶⁾ 工事の過程では、数々の重大事故に見舞われた。工事の区域は地盤の悪い大阪のなかでも特に軟弱で、また当時の土木技術が未熟だったためである。⁽⁷⁾ 植民地下の朝鮮半島から流れて来たであろう「洪じいさん」もまた、この工事で「足」の「親指と／中指と／小指」を「もがれ」、うまく歩けない体になってしまった者のひとりである。⁽⁸⁾ 大阪市の中枢を南北に縦断する地上と地下の道、御堂筋は、物と人を大量に輸送し、近代都市を形成する大動脈として、大阪さらには日本の経済活動を支えてきた。⁽⁹⁾ しかし、その華々しい「道」の下には、地を這うようにして「道」を掘り進んだ「洪じいさん」のもがれた足の指三本が埋められている。ここでは、「初夏」の明るい陽射しに隈どられた地上の「道」と、工夫の悲嘆が埋められた仄暗い地下の「道」との対比が鮮やかである。

さらにこの詩には、もうひとつの重要な対比が描かれている。「帰国者大会」を直指して「山出しの猪さながら」走り去る「貸切バス」と、足が不自由で遅々とした歩みの「洪じいさん」である。「帰国者大会」に参加するため、「洪じいさん」は三〇年ぶりに大阪を訪れた。だが、足が不自由な「洪じいさん」は、家からバスが出る「奈良県本部」までの道のりを「六度も休まにやならなか

った」という。そのゆつくりとした歩みとは対照的に、「帰国者大会」に向かう「貸切バス」は、「洪じいさん」の足の指が埋められたアスファルトの上を、「一目散」に走り去るのである。「洪じいさん」がそうであるように、人間の歩みには、それまで生きてきた人生の重みが刻まれているものだろう。何の迷いもなく「一目散」に走る「貸切バス」は、果たして、乗客のそのような人生の歩みのリズムを壊さずに目的地に辿り着くことができるのだろうか。

また「超満員」、「最後の横ぶれ」という「貸切バス」のイメージは、『新潟』に登場する船のイメージとも重なる。金時鐘は『新潟』において、近代以降に多くの朝鮮人が日本へ渡って来た歴史的事実を、「玄海灘の横揺れに／すえていたのは／押しこまれた／もやしの／樽だった。／むきだしのまま／からみあった／別離が／もがれるだけの根ひげをふるわして／にぶい灯りに／群れていた。／二万の夜と／日をかけて／すべては今語られるべきだ。」(Ⅱ 海鳴りのなかを①)とうたった。「丸ごと食っても足りない／他人の土地」(Ⅲ 緯度が見える①)から流れて来た者、「徴用という箱舟」(Ⅱ 海鳴りのなかを①)に乗せられて来た者、あるいは「ヤミ船」(Ⅲ 緯度が見える②)で日本に辿り着いた「ぼく」のような者…。それぞれ事情は違

つても、皆「日本へ釣り上げられ」（「I 雁木のうた①」）るよ
うに海を渡つて来たのだ。⁽¹⁰⁾

金時鐘は、日本に渡航する朝鮮人を、「もやし」という人格を奪
われた存在として描いた。これに対して、もうすぐ帰国するであ
るう「洪じいさん」には、人称と個別の物語が与えられている。

在日朝鮮人の「帰国」とは、日本との歴史的な関わりのおかげで奪
われてきた人間性を回復させる道りであるべきである。おそら
くは植民地時代に荷物のように運ばれてきたであろう「洪じいさ
ん」の帰国は、再び荷物のように運び出されるものであつてはな
らないはずなのだ。

「道（洪じいさん）」は、一読すると、あたかも帰国事業への物
語を補填する作品であるかのようにも読める。だが、実はそこ
は、帰国事業に対する意識の微妙なずれが、周到に描きこまれて
いるのである。一九五九年六月という極めてはやい時期に、帰国
事業が取りこぼしていった個人の思いや人生に強い光を当て
た詩として、「道（洪じいさん）」はしっかりと記憶されるべきで
あろう。

二 祖国へつづく〈道〉 —— 「海の飢餓」

前節で論じたように、「道（洪じいさん）」には、一大事業とし

て遂行される帰国に対する金時鐘の違和が秘められていた。そこ
には、「道」は与えられるものではなく、人々の叡智によつて想像
／創造されるものなのだという金時鐘の信念がうかがえよう。そ
れでは、金時鐘にとつてあるべき〈道〉とは、どのようなものだ
つたのだろうか。

次の引用は、『新潟』の冒頭である。

目に映る／通りを／道と／決めてはならない。／誰知らず／
踏まれてできた／筋を／道と／呼ぶべきではない。／海にか
かる／橋を／想像しよう。／地底をつらぬく／坑道を／考え
よう。／意志と意思とが／かみ合い／天体をもつなぐ／ロケ
ットの／マツハの空間に／道を／上げよう。／人間の尊厳と
／智恵の和が／がっちり組みこまれた／歴史にだけ／ぼくら
の道は／あけておこう。／そこを通らねばならない。⁽¹¹⁾

（「I 雁木のうた①」『新潟』）

このように『新潟』は、既存の「道」を否定し、新しい〈道〉
を想像／創造する宣言からはじまる。だがこの直後には、日本の
植民地統治・アメリカの軍事統治・四・三事件が錯綜するように
描かれ、「彼ら」と「ぼくたち」の世界が暴圧的に真つ二つに分か

たれていく(「大通り」・「土中の迷路」、「ジープ」・「夜行性動物」、
「白昼の闊歩」・「跳梁を秘めた／原野の／夜の／徘徊」、「西」・「東」、
「光」・「闇」、以上「I 雁木のうた」①「より」)。しかし、金時鐘は
世界を分かつかつこのような強大な力に抗うように、『新潟』全篇を通
して粘り強く〈道〉を描いていくのである。⁽¹²⁾

一方、『新潟』とほぼ並行して書き進められていた『日本風土記
II』においても、やはり様々な暗喩によって〈道〉が想像／創造
されている。本節では、そのひとつである「海の飢餓」について
分析を進めたい。

「海の飢餓」の舞台は満員電車のなかである。見知らぬ者同士が
一斉に詰め込まれ、同じ場所に運ばれて行くが、それぞれ行き先
も考えていることもばらばらであるという劇的な空間だ。そのな
かで、在日一世と思われる女性「あなた」と、「同族」である「ぼ
く」との「出会い」とすれ違いのドラマが展開していくのである。

大都会の／消化気管マの前で／あなたとぼくが／対置される。

／——これは　もう／　ぼくの意思ではない。／／吸いこ
まれる側の／ぼくと／吐きだされる側の／あなたとの出会い
が／なぜこゝも苦痛にゆがむのか？／——その間もあなた
は果敢な逆流を／　二度もやつてのけた。／／一つの穴く

らの中で／ふんづまりの生活が交錯を余儀なくされるとき。
／むきだしのままの臓物が／音をたてて／嘔吐をはじめの
だ。／——あなたの懸命の奪回が／　石白ほどの骨盤をふ
るつて頂点に達する。

(「海の飢餓」)

冒頭の一節には、電車がホームに到着する度に、乗客がホーム
に押し出されたり車内に押し入れられたりする状況が指し示され
ている。しかも、「ぼく」は「吸いこまれる側」、「あなた」は「吐
きだされる側」として、「ぼく」と「あなた」は「対置」されてし
まうのである。「石白ほどの骨盤」を持つたどっしりした体格で、
商売に関する品である大きな荷物を持つていることも、「あな
た」が「吐きだされる側」になってしまふ要因としてあるのかも
しれない。だがここでは、「ぼく」が見た目にはほとんど日本人と
変わらないのに対し、一世と思われる「あなた」の方は典型的な
在日朝鮮人女性として描かれていることが重要である。つまり、
ここには無意識レベルにまで至る日本人の朝鮮人に対する排除、
さらには同じ朝鮮人でありながらも手放しにはつながら合えない
朝鮮人同士の断絶が表現されているのだ。

「あなた」は人の波に押し出されながらも、「果敢な逆流を／

二度もやっつてのけて」見せる。だがこのあと、ついに「むきだしのままの臓物が／音をたてて／嘔吐をはじめ」る。そして、「あなた」の必死の抵抗にもかかわらず、「あなた」は電車の外にはじき出され、そのままホームに取り残されることになるのである。

急速にひきはなされてゆく／同族同志の結合点。／加害者に組した無力な目撃者がおびえだすのは／ちようどこの距離においてだ。／——あなたはしまりきる扉にすがつて／

“かえせーかえせー”と叫んだ。／／さあ、これがぼくの臓物だ。／散乱した白米の上に／投げだされたゴム長。／つつ立つ靴。さされた傘、傘……／爪先たつ目撃者のぼくがぐたぐたに踏みつけられて／際限ない両極をめぐりはじめる。／——ぼくは誰に、何を、なんと叫べばいいのか?!

(二) 海の飢餓

この場面では、「あなた」の荷物が散乱する車内と、「あなた」が取り残されたホームの様子が、「ぼく」のまなざしのなかで交錯している。「散乱した白米」、「投げだされたゴム長」は、「あなた」の生活がかかった商売に関する品であると推察されるが、この荷物は「あなた」にとつての異国、日本暮らしの暗喩でもある。

そこには、かつての宗主国で安定基盤を持たずに生き抜いてきた、「あなた」の意地と誇りがぎつしりと詰まっているのだ。その大切な荷物を残し、車外に「吐きだされ」てしまった「あなた」は、扉にすがつて「かえせーかえせー」と大声で叫ぶのだが、「あなた」のこの叫びは、植民地下から解放後に至るまで、あらゆるものを奪われ通した者の突き上げるような叫びとしても響いていよう。

ここで、「海の飢餓」の分析を進めるために、金時鐘のエッセイを参照したい。金時鐘は、レジャーブームのただ中、新宿駅のホームに大量のスキー客が溢れている光景を目にしたときのエピソードについて、「今ではますますそういう風景がどこにも見られるようになりましたが、七、八年前、東京での会合の帰りのことでした」と述べ、次のように語っている。

そのような無関心の「量」の中を私がかいくぐってゆく。無関心が絶対量となった中を、私は針で縫うように天に至らねばならない。それでいて、この群集は私を「朝鮮人」として識別できる触角だけは万全である。この時に感じる恐怖というものは理屈ではない。個としての朝鮮人が日本人の絶対量の中をかいくぐる時の恐怖、それは「私」という「個」が背

負いこんだ絶対の恐怖であります。私の網膜の中へ電車がすべり込む。車掌が下りたつて、おまえ達の行くところはあそこだ、と指さす。そのリュックサックはみるみる背囊になり変わり、林立したスキーは銃剣に早変わりして、彼らは何の変哲もなく移動を開始するのです。私はこの恐怖を、「日本人」に知らせる手だてを持ち合わせていません。知らせようがないくらい、「日本人」と「朝鮮人」のコミュニケートは原体験の端緒から食い違っているのです。⁽¹⁶⁾

(金時鐘 「朝鮮人の人間としての復元」)

このような金時鐘の感覚を踏まえるならば、全くの他人同士が乗り合わせていたはずの満員電車の乗客は、ひとつの巨大な塊に変貌して、「ぼく」と「あなた」の前に立ちはだかるのではないだろうか。「大都会の／消化器官」⁽¹⁷⁾という異様な表現は、個人の意思を超えて働く暴力的な力の暗喩ともなっているのだ。個別の状況では必ずしも不幸な出会いばかりではないはずの朝鮮人と日本人が、極めて暴力的な力関係のもとに置き換えられてしまうのである。さらに、ここで注意しなければならないのは、「あなた」は「吐き出される側」であり、「ぼく」は「吸いこまれる側」であるということだ。「あなた」は身体的に刻まれた民族性ゆえに露骨な排除

を受けるが、「ぼく」は黙っている限り日本人のなかに紛れこむことができない。それはともすれば、「加害者に組した無力な目撃者」になってしまいう危険すら伴う。そのために、「同族」であるはずの「あなたとの出会い」は、「ぼく」にとつて「苦痛にゆがむ」ものになるのだ。

「ぼく」は、「あなた」が残っていた荷物の中身を、「さあ、これがぼくの臓物だ。」と乗客に向かって呼びかけてみる。しかし、その「あなた」と「ぼく」の「同族同志」としての絆は、押し合う乗客によって「ぐたぐたに踏みつけられ」ることになるのである。そして、「ぼく」は「あなた」が吐き出されたあと、この満員電車のなかで「ぼく」ひとりが朝鮮人であるという恐怖に耐え、「ぼくは誰に、何を、なんと叫べばいいのか?」と胸の内を叫ぶ。ここには、日本社会で在日朝鮮人がマイノリティーとして暮らすことの苦しさ、あらゆる位相で描きこまれていよう。その苦しさが極限に達したところで、場面は突然展開し、パノラマのように視界が開かれるのである。

俊足のディゼル・カーをもつてしても／電車が海をつつきつたというニュースを／ぼくはまだ聞かない。／ただ どころこの飢餓がゆめみる／茫洋たる発芽が／車窓をよぎつてぐん

ぐんひろがつてゆくのだ。／これはまさしく／海だ。

(「海の飢餓」)

これは、窓外に海が広がる情景の描写であるとともに、それが祖国へとつながる海にほかならないという「ぼく」の確信でもあろう。「俊足のディゼル・カー」の威力をもってしても、いまだ海に道を通すことはできていない。ただ、極点に達した「どろんこの飢餓」だけが、その想像力をもって海そのものを〈道〉としてぐんぐん広げていくことができるのだ。

ここで、「海の飢餓」の次に登場し、第一部の最後を飾る「わが性わが命」は、「ぼくら」の〈道〉として、再びダイナミックに浮上するのではないだろうか。⁽¹⁸⁾「わが性わが命」の海は、死者の記憶が堆積した場としてだけではなく、歴史の大きな流れのなかで引き裂かれた者たちの〈道〉としても機能しはじめるのだ。このとき、『日本風土記Ⅱ』は、ふたつの軸を基点に大きな円環を描き始める。ひとつめは、「海の飢餓」、そして「わが性わが命」において想像される、観念としての〈道〉である。そしてふたつめは、多くの矛盾を孕みながらも、「目の前にあった限られた選択肢を認識し、そのなかで最善の選択をしようという強い決意のもと、確かに自ら選択」⁽¹⁹⁾して、今まさに帰っていかうとする者の、痕跡と

しての〈道〉である。⁽²⁰⁾このふたつの駆動軸を備えた円環運動によって、「ぼくら」の〈道〉は、ゆっくりと押し進められていくのだ。

金時鐘は共和国への帰国について、「誰に許されて／帰らねばならない国なのか。／積みだすだけの／岸壁を／しつらえたとおり去るというのは／滞る貨物に／成りはてた／帰国が／ぼくに／あるというのか。」(『新潟』「Ⅲ 緯度が見える④」)と自戒をこめて記した。だがその理念が、帰国船に乗って共和国に帰って行こうとする者、そして実際に帰って行った者たちを否定するようなものであってはならないだろう。彼ら、あるいは彼女らにも、それぞれの切実な決断と、その後も生き抜かなければならない長い人生があったはずなのだ。金時鐘は、日本の植民地支配に押し流されるように日本に渡り、そしていま共和国に帰ろうとする「洪じいさん」の物語を、詠嘆を込めて描いた。しかしその詠嘆には、時代や空間を意識的に交錯させることで、鋭い批評性が与えられているのである。⁽²¹⁾

『地平線』の特に第一部「夜を希うものうた」では、朝鮮戦争への反戦運動を背景に、朝鮮人と日本人との連帯の可能性が兆されていた。それを引き継ぐ形で、『日本風土記』においても「若いあなたを私は信じた」では、若い世代にたいする「私」の期待感がさわやかな揺らぎのなかで描かれている。だが一方で、「ぼくが

ぼくであるとき」では、日本人の左翼と「ぼく」との間に意識の微妙なずれも生じはじめている。さらに『日本風土記Ⅱ』の「海の飢餓」になると、日本人と朝鮮人の関係が、生理的な排除にまで至ってしまうのである。

敗戦直後の日本においては、日本人も朝鮮人も闇商売はごく日常の光景であったと思われる。しかし、「海の飢餓」（一九五九年五月発表）の時代になると、おそらくはみすぼらしい格好で大きな荷物を提げているであろう「あなた」の姿は、電車のなかでも際立っていたに違いない。あいかわらず貧しい「あなた」に対し、豊かになりつつある日本人は、生理的嫌悪として「あなた」を車外に「吐きだ」してしまうのだ。それは、外在的な差別から、表面上は無関心を装いながらも実は強力な排他性をもつ差別へと、差別が内面化されていく過程としても捉えられていよう。

しかし、そのような苦しさのなかで思い描かれる強い渴望こそが、一人ひとりの〈道〉として立ち上がっていくはずである。こうして見ると『日本風土記Ⅱ』はまた、お互いを理解することがますます困難な状況のなかで、強いられた「道」や与えられた「道」を峻拒し、朝鮮半島と日本を分かち海、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国を分かち三八度線に「道を／上」げる試みであったとも読むことができるのである。

三 再編される〈労働〉——「労働昇天」

金時鐘によると、「労働昇天」⁽²²⁾は『在日』の働くということのひとつとして書いた⁽²³⁾作品であるという。金時鐘は、食べることも事欠く生活のなかで、妻の父親が経営していたミシン工場⁽²⁴⁾で働いていた時期があった。「労働昇天」は、そのときの労働体験をもとに書かれた作品である。主人公の「俺」は、ミシンのハンドルを組みたてる工場で、単調な長時間労働に従事する在日朝鮮人である。朝から晩まで同じ場所に座り通し、ひたすら部品を組み立てる労働の日々に、「俺」の肉体と精神は摩耗していく。だが、そのような袋小路の状況においても「俺」は現実を追認しようとはせず、「テロ」⁽²⁵⁾への空想に浸ることで、鬱憤を抱えた日々の暮らしをつなぎとめている。

自身の労働体験をモデルに、一在日朝鮮人の労働風景を克明に描きとった「労働昇天」は、同時代の労働、とりわけ在日の労働が抱えていた矛盾を鋭く問うた作品であるといえるだろう。本節では、「労働昇天」の分析を通して、金時鐘がとらえた労働の内実を考察し、金時鐘がいかにその閉塞状況を打破しようと試みたかを探りたい。

次の引用は、ミシン工場での「俺」の労働風景である。

俺は ここに こうして／十三時間も座りとおして／この前
近代的なメード・イン・ジャパンに／わが分身の一つ一つを
組みこんできた／しめつばい露地の／油にしゆんだ喧噪と鉄
塵の中で／俺の青春が理由もなくほそつてゆくとき／自走砲
となつたうづぼつたる憤懣が／間断なく街のどまん中へぶち
こまれるのだ。／日に何十人となく／俺の手にかかつた亡霊
が街を埋めてゆく。／こいつらが一つの力にならないために
も／俺は決して特定の人間をねらつたりはしない。／ただ殺
す。／そのためにのみ／この時代かかつた間口の土間で／手
でまわすミシンのハンドルを組んでいる。

(「労働昇天」)

引用部から読み取れるのは、「俺」が油と喧噪にまみれた環境で
単調な長時間労働に従事しているということ、そのような押し込
められた生活に「俺」は鬱憤を抱えているということである。そ
れでも、労働以外に自由な時間を持てる余裕があるのであれば、
そこで鬱憤を晴らすことができるのかもしれない。しかし、寝る・
食べる以外の時間はほぼ労働に従事しており、おそらくは休日も
ほとんどとれないであろう生活においては、その閉塞感を突破す

るためには、〈労働〉そのものを変革する以外に方途はないのだ。

ミシン工場で働く「俺」は、「ミシンのハンドルを組」むという
工程を担当している。労働者がそれぞれの工程を分担する分業は、
生産力を飛躍的に高め、安定的な大量生産を可能にした。しかし、
個人の人格や感性を必要としない単調な労働は、「俺」から自己の
存在意義を奪い、激しい無力感へと追いやっていくといえよう。

これに対して「俺」は、大量に同じものを生み出す行為を、自分
の「分身」を無数に生み出す行為へと読みかえることで、工場の
歯車の一つとなることに抗おうとする。決められた工程に沿って
部品を組み立てるという作業において、「俺」はあたかも芸術作品
を創出するかのよう。「わが分身の一つ一つを組みこ」み、生産
物をその度ごとに唯一のものとして送り出すのである。こうして
増殖する「俺」の「分身」は、「自走砲」となって街に飛び出し、
テロを敢行する。

ここに描かれているのは、単調な長時間労働に従事することの
苦しさ、それに対する「俺」の激しい抵抗である。しかし、そ
の苦しさは、なぜ「俺」をテロという極端な行為にまで駆り立て
るのだろうか。それは、「俺」の次のような社会認識に根ざしてい

えない。それで、小松製作所あたりからおりてくる下請けの下請けに、ありつたけのロクロ業者がたかり合う。⁽²⁷⁾

(金時鐘「差別の醜さと解放への道」)

次の引用は、『新潟』の「I 雁木のうた②」の一節である。ここには、先の引用で金時鐘が語っていた、朝鮮戦争期における在日朝鮮人の労働風景が描かれている。

信管の／ネジを切りながら／その異様な／細さに／すっかりへたった／つんつるんの／指先が／指であることを／忘れてしまう。／感触のない／思考は／そこひの／角膜に似て／昼夜の／明暗をさぐる程度の／映像を／うかがうのである。／これが／親子爆弾の／子爆弾の／信管の／ネジで／ある。／これしきの／ことで／炸裂／する／朝鮮の／空／は／妙な／空だ。／青すぎる／せいかも／知れん。／小松製作所／ほどの／会社から下りてきた／下請の／下請に／腕におぼえの／彼氏／すっかり／ごきげんである。／強度の近眼鏡に／セーブ油を泌ませて／光度に弱い／その眼が／計算を／けずっている。

(「I 雁木のうた②」『新潟』)

この工場で作られているのは、爆弾の「信管の／ネジ」である。工場で作られた「ネジ」は、どこかに運ばれ、爆弾の一部として組み立てられ、いずれ確実に朝鮮戦争で同族を殺すための武器として使用されよう。だが、「下請の／下請」であるこの工場の過程では、それはただの一本の「ネジ」に過ぎないのである。零細な町工場で食べていくためには、長時間労働に従事し、とにかく数をこなさなければならぬ。こうして、日々の労働で麻痺させられた「感触のない／思考」は、工場主の「ぼく」を、「際限ない数字の／虜」へと陥れてしまうのだ。

このあと、朝鮮戦争に反対する組織の活動家が「ぼく」の工場に現れ、場面は急展開する。「一撃のもとに／父の遺産を／沼地に／沈め／一団は／歓声とともに／飛び去った。」と、活動家たちは「ぼく」の工場を一気に破壊して去っていくのである。「I 雁木のうた②」は、朝鮮戦争が在日朝鮮人に強い矛盾を生々しく描きとっている。生活を維持するために朝鮮戦争という暴力に加担してしまっている「ぼく」、それを暴力によって破壊しようとする「一団」。朝鮮戦争への加担を阻止するためにとられたのは、集団による暴力であった。それは、暴力の連鎖を断ち切るというよりは、むしろ新たな暴力を生み出しかねない方法である。ここには、朝鮮戦争が在日朝鮮人にもたらした、和解とはほど遠い袋小路の状

況が指し示されていよう。詩は、「マテエ……／オレア——ヤメ
ヤア——／チョウセン／ヤメヤア——！／うづくまつている／
耳朶を／打ち／黒いくまどりとなった／影が／大通りを／直角に
／おれ曲がり／コンクリート塀へ／彫りつけられたように／つん
のめつていた。」と結ばれる。この詩においては、朝鮮戦争期の痛
みを多面的に写し取り、その痛みと無力感のなかに沈みこむこと
に主眼が置かれているのである。

「I 雁木のうた②」も「労働昇天」も、執筆されたのはいずれ
も一九六〇年頃であり、ほぼ同じ時期である。⁽²⁸⁾しかし、「I 雁木
のうた②」が朝鮮戦争期を現在形としているのに対し、「労働昇天」
は朝鮮戦争後の世界を現在形としている。このことは、「I 雁木
のうた②」と「労働昇天」に、いくつもの対称性をもたらしてい
よう。

「I 雁木のうた②」の「ぼく」は、「下請の／下請」という厳し
い労働条件のなかで思考が麻痺し、朝鮮戦争で使われる爆弾の部
品を製造しているという事実に想像力が働かなくなってしまうつ
ている。これに対し、「労働昇天」の「俺」は、軍事産業とは何の関
わりもなさそうなミシンを組み立てているにもかかわらず、過剰
なまでに製品の行方について自覚的である。また、「I 雁木のう
た②」の「ぼく」の行為は、「一団」の集団的暴力によって、一方

的に終止符が打たれる。一方、「労働昇天」は、ひとり孤独にテロ
への空想をつづけることで、形を変えて（継続する朝鮮戦争）に
組み込まれることに抗おうとする。

朝鮮戦争を軍需景気として享受し、敗戦後の疲弊から立ち直
つていった日本は、「労働昇天」の時代には高度経済成長のただ
中にいた。日本を軍事的足場として熱戦を呈した朝鮮戦争から、
日本人にとってはもはや意識の外でしかない（継続する朝鮮戦争）
へ——。それは、みな貧しく、そして反戦運動を通して朝鮮人
と日本人がある種の連帯をもち得た時期から、経済的豊かさへと
急速に傾斜していく日本人と、そこからとりこぼされていく朝鮮
人の断絶が浮き彫りになっていく時期への転換でもあった。朝鮮
戦争後の世界において、底辺労働を強いられながらも、そのよう
な時代の空気と、もはや常態と化しつつある祖国の分断に必死に
抗おうとする「俺」の営みは、だからこそ一層の孤独へと陥って
いくのだ。従って、「俺」が懸命に「分身」を放ってテロを起こす
と、さらに大きな暴力が「ダンブパー」となって「俺」に襲いか
かり、「俺」を「昇天」させる。

こざつぱり着がえた俺は／三十分のちにここを出た。／空に
なつたべんとう箱の／あのいやなじやれつきを気にしながら

／角をよぎつた／時だ！／奴の美事^{マイ}な変身は／ダンブカー
を乗つけてきて／あつ／という間に／俺を昇天させた／それ
で／十二番目の片割が／俺の俺になり代わつて／あの組立場
の仕上げ台に／おさまっていることになる。／このハンドル
が／せめてあのダンブカーを撃ち抜く多身銃になりはせぬか
と／水平に／把手を擬し／日夜歯と歯を噛み合わせるイメー
ジに／自足してゆく／創造者を見るのである。

（「労働昇天」）

「労働昇天」の結びには、抵抗しても抵抗しても、さらに大きな
暴力に潰されてしまう出口のない状況が描かれている。それにも
かわからず、「俺」は何度でも「分身」を送りこみ、そのような暴
力に凶太く立ち向かおうとするのである。生きるためには働かな
くてはならない。しかし、日本で働くということは、その労働が
冷戦に組み込まれ、構造的に祖国の分断を支えてしまうことを意
味する。巨大な欲望の渦巻く構造的な暴力に対し、個人のできる
ことは限られている。これに対して「俺」は、殺されても殺され
てもしぶとく「分身」を送りこみ、どうしようもない袋小路の状
況をのたうつことで、それに対する抵抗を示すのである。「労働昇
天」は、出口のない状況からの突破口を指し示すというよりは、

その出口のない状況をどこまで描き切ることができるかに、詩の
生命力が賭けられているのである。

「労働昇天」が発表されたのは、『詩学』（一九六〇年八月）で組
まれた「ガリオン特集」においてであった。この特集には、『ガ
リオン』を金時鐘とともに創刊した鄭仁と梁石日の詩、そして金
時鐘によるエッセイ「反逆者からの反逆へ」が掲載されている。

このエッセイで、金時鐘は『ガリオン』同人を『チンダレ』残党
と呼び、「政治主義者」の「統制された美意識からの解放を希う同
志らの呼応を信じて、なお苦闘を辞さずにいる」と主張するのだ
ある。

祖国、朝鮮民主主義人民共和国が祖国の平和的統一独立を目
ざし、その担保である民主基地強化のため千里の駒を駆つて
いる火のような氣勢の中で、われわれだけが依然として孤立
していることに、大きな不安と焦燥を感じないでいられない。
まさに恐怖ですらある。何もかもかなぐり捨てて、あの渦の
中へ溶けこんでしまおうとする衝動をわれわれはいつももつ
ている。またその中心ではないまでも、その渦の中にともか
く居るのだという自覚をあわせてもつているものである。こ
のような中で、先進的祖国をもつ公民の矜持の実体を自己に

課してあげてゆくということは、冒険以上の戦斗そのものである。われわれが反逆者でない証しのためにこそ、ガリオンの反逆を固執しているのである。

(金時鐘「反逆者からの反逆へ」)

「在日」という、自分たちの足場に則した表現を模索しはじめた『ヂンダレ』は、共和国に対する「反逆者」として否定された。しかし、金時鐘はこのエッセイで、スローガンを振りかざす「政治主義者」に対し、共和国の「矜持の実体」を本当につかみうるのは自分たちなのだという自負と決意を主張している。それを金時鐘は、「反逆者からの反逆」と呼んだのである。

「労働昇天」は、生きる場である(労働)を構造的にとらえ、抵抗を示しつつけることで、日本という場において祖国の分断状況に意識的につながる⁽²⁹⁾とした、意欲的な詩であった。それは、「在日という副詞」を生きていることを「主体性喪失」として否定した組織に対し、金時鐘が提示したひとつの答えだったはずである。「労働昇天」は、この時期に金時鐘が切り拓いた、在日朝鮮人文学の新たな領域だったのではないだろうか。

四 貨幣経済への反逆 —— 「しやりっこ」

「しやりっこ」は、くず拾いで生計を立てる、在日朝鮮人と思われる親子四人の物語である。この詩は、一九五八年一〇月刊行の『ヂンダレ』第二〇号に発表された作品で、『日本風土記Ⅱ』では第二部の後半に配置されている。「しやりっこ」を発表する以前から、金時鐘は一時アパッチ族に参加していたことがある⁽³⁰⁾。アパッチ族とは、元大阪陸軍砲兵廠跡に眠っている鉄塊を闇にまぎれて掘り起こし、生活の糧にしていた集団の俗称である。「しやりっこ」には、金時鐘がそうした生活のなかで実際に使っていたと思われる隠語が、いくつも散りばめられている。

むかしはあかを喰った。／今は白を喰っている。／喰って／生きる。／生きる。／しやりっこじや／間に合わねえから／硬貨を喰う。／喰う。／喰うんだ。／威勢よくはいかねえんだ。／丹念に／奥の歯ぐきをゆきまして／青ずっぱい唾が／飴になるまで／ころがしとおすんだ。／がりっこ／しゆるっこ／がりっこ／しゆるっこ／こくつ／こくつ／じゆるっこ／飴が延びる／下りる／じゆるつ／るーと／たまつてくる。／おれのからは／ゼニっこで／一ぱい。／今に頭までも／つまるだろ

う。／それで／からだは／お金そのもの。／お金までが／暮
し／そのもの。／しやりっこ／しやりっこ／横へ振つても／
しやりっこ／地べたへかかんでも／しやりっこ／前後左右が
／しやりっこ／しやりっこ。

(「しやりっこ」)

冒頭から隠語が頻出し、そのうえその隠語が幾層にも暗喩の光
を放っている。まず、「あか」は銅、「白」はアルミ⁽³¹⁾、「喰う」は金
属を拾う(盗む)ことである。同時に「あか」は共産主義、「白」
はそれに対する反共主義のことでもある。さらに、「喰う」は文字
通り「喰う」こととも重なっており、詩の後半に至ると「便秘」
や排便にまでイメージが広がっていく。

金時鐘は「しやりっこ」について、「割と評判よかった作品」で
「群読などにも何回も使った⁽³²⁾」と語っている。確かにこの作品は、
決して難解な詩ではない。たとえひとつひとつの言葉の意味がわ
からなくても、軽妙なリズムのなかで詩を味わうことができるの
だ。だが、現在の読者からすると、隠語の意味や、そこに込めら
れた背景を読み取ることがやはり困難である。それに対して、当
時の読者の多くは、身近な生活感覚のなかで、「あか」「白」「喰う」
に鋭敏に反応し、この詩を受容することができたのだろう。

このあと「しやりっこ」は、くず拾いで生計を立てる親子四人
の物語として、次のように展開していく。

りんーと／鈴には／いつなるの？／まだ／まだ。／お前の
お前が／お前を／生んで／父が死んで／固められて／お前の
母が／おりかさなつて／おれらが／一つの／山となつたとき。
／誰かが掘つて／いうだろうよ。／あ。／これはアルミの
／山だ。／金のにするんだ。／金のにするんだ。／あたし
は／銀のよ。／一日の稼ぎは／三枚。／保ちのいいのは／ゼ
ニっこです。／わざわざ変えた／三百個。／親子四人で／が
りっこ／しゆるっこ／がりっこ／しゆるっこ

(「しやりっこ」)

「一日の稼ぎは／三枚。／(中略)／わざわざ変えた／三百個。」
という一節から、くずを売って得る親子の収入は、一日あたり三
〇〇円程度であったことがわかる。これは、当時の学生アルバイ
トの日当と同等かそれ以下であり、親子四人が暮らしていくには
極めて乏しいものであったと想像される。それでも親子は、三枚
の百円玉をわざわざ三〇〇個の一円玉に交換することで、なんと
かその価値を上げようと試みるのである。貨幣価値としては、三

枚の百円玉も三〇〇枚の一円玉も全く同じである。だが、貧しい暮らしのなかでは、「三百個」の一円玉の方が、「三枚」の百円玉よりもはるかに魅力的であったのだ。こうして親子は、山盛りの硬貨を前に、お金持ちになつたような空想に浸ることができたのだらう。

そして驚くべきなのは、分量の増えた硬貨が、実際にその効用を得ているということである。親子は、「保ちのいいのは／ゼニっこです。」「しやりっこじや／間に合わねえから／硬貨を喰う。／喰う。／喰うんだ。」と言つてのける。乏しい収入で米を買つていたのではとても足りないからと、親子は白濁したアルミ玉を白米に見立て、直接硬貨を喰つて生きているのだ。そして、「しやり」、すなわち白米の隠語から造語されたと思われる「しやりっこ」は、独特のリズムのなかで、硬貨が腹のなかで擦れ合う音へと変換されていく。ここでは、いくつかの隠語が軽妙なリズムによつて揺れ動き、その意味が徐々にずらされていくのである。もちろん、現実には硬貨を食べて生きることなどできない。しかし、大量の硬貨を「喰う」という空想は、飢えることのつらさ、そして自分たちを飢えさせるものの正体を、したたかに笑いとばしていよう。このように「しやりっこ」は、民衆の生活をしたたかに、しかしおおらかにうたつた詩である。その内容は切実な悲哀に満ちて

いるが、「しやりっこ」の家族が描く豊かな空想と軽妙なリズムは、ほのぼのと明るい光すら放っているのだ。しかし、くず拾いにまつわる朝鮮戦争期の次のような光景が想起された瞬間、「しやりっこ」は一転して、社会の暗部を抱えた重々しいリズムとしても響きはじめる。

一番やりきれなかつたのは、胸まで運河につかっている同胞像。この運河とは、在日朝鮮人がもつとも密集して住んでいる大阪の、生野区を流れる——といつても実質的には澱んだなりなんだが、通称どぶ川と呼ばれている「平野運河」のこただけど、この周辺は零細な鉄工所が戦前から軒をつらねていたところなので、製品の削りくずなどがわりと沈んでいたわけ。その鉄くずをどぶさらいしてまでカネへん景気で拾つてくる。日本の企業はそれを鉄にし、そいつをまたネジにしてくる。そういう、組み上がったものがいかよものものかもわからん仕事をさせるのが、ぼくは「ナシヨナル」⁽³⁶⁾みたいな気がするんです。

(金時鐘「差別の醜さと解放への道」)

前節(「労働昇天」)では、朝鮮戦争で使われる爆弾のネジの製

造に従事する在日朝鮮人について、金時鐘が語った文章を引用した。右記の引用は、その続きにあたる箇所である。社会の底辺に追いやられた在日朝鮮人が日銭を稼ぐためにくず鉄を集め、それを日本の企業が鉄にし、その鉄を別の在日朝鮮人がネジにし、それが爆弾の一部として組み立てられ、その爆弾が朝鮮戦争で朝鮮人を殺傷する武器として使われる——。引用部からは、巧妙に行方をくらませた「敵」に対する、金時鐘の怒りが感じられよう。

「しやりっこ」が発表されたのは、朝鮮戦争が休戦を迎えてから五年後の一九五八年一〇月である。従って、「しやりっこ」のくず拾いが、朝鮮戦争と直結するというわけではない。だがここで、前節で考察した「労働昇天」の「俺」が、ミシン工場という非軍事的な労働現場から「反共同盟」へと想像力を膨らませ、〈継続する朝鮮戦争〉に組み込まれる労働の不条理を問うていたという事実に注目したい。すなわち、「しやりっこ」のくず拾いもまた、日本の経済システムに取り込まれるという形で、〈継続する朝鮮戦争〉を支えてしまっているのではないか。そして金時鐘は、そこに取り込まれながらもそのような経済システムを切断する機能を「しやりっこ」に忍ばせることで、水面下で〈継続する朝鮮戦争〉に抗っているのではないだろうか。「しやりっこ」のくず拾いは、「平和共存」時代の日本の高度経済成長を、そこから取り残された

在日朝鮮人の側から強烈に照らしだしているのだ。

金時鐘は「しやりっこ」について、「みんなシロに傾いていった時期だった」、「共産党が国会議員ではほとんどゼロに近い状態になって、共産党アレギーが行きわたって、社会主義への希望みたいなものが退潮していった時期³⁶」だったと振り返っている。そのような時代の変化は、「むかしはあかを喰った。／今は白を喰っている。」という冒頭の一節に端的に示されている。金時鐘は人々の政治に対する関心が薄れ、経済中心主義へと大きく舵を切ったであろうとする同時代の日本に対し、強い危惧を抱いていたのである。金時鐘にとつてそれは、朝鮮半島に対する人々の関心をますます遠のかせ、分断を自明のものとする危機的な状況として映っていたに違いない。

次の引用は、「息子」と「娘」が家を飛び出し、夫婦ふたりが残された、四〇年後の場面である。

年とつて／稼ぎのゼニ³⁷っこが／なくなつて／頭だけが／はつちや^マつて／しやりっこ／しやりっこ／もぐもぐだけじや／通らない。／四十年越しの／便秘に／妻は今も／しやがんだりです。／ばあさん／まだかい？／いや／今に出来ますよ。／出来ますよ。／化石しかけた／おなかを／おさえて／妻は／

じつと／こらえている。／胃ぶくろで／こつてり／ねられたものが／大腸を通り／肛門口を抜け出る間。／黄金になりま
す。／きつとなります。／妻は／信じて／待つている。／出
るとも。／出るとも。／廃坑では／ない。／まだ誰にも／掘
られた／穴では／まだ／ない。／／二人／くろくろ／横に／
なる。

(「しやりつこ」)

この場面では、「喰う」の連想から排泄へとイメージが広がり、さらには排泄物の連想から「黄金」にまでイメージが広がっている。年老いた夫婦は、白米に見立てて硬貨を「喰う」という生活の末に、それがお腹のなかで「こつてり／ねられ」、いつか「黄金」として排出されることを夢みているのだ。食事もままならない貧しい生活のなかで思い描かれた夫婦の錬金術は、現実の社会を突き動かす経済システムに対する、強烈な諧謔として機能している。

岩井克人は『貨幣論』(筑摩書房／一九九三年三月)において、貨幣を成り立たせる論理について、次のように考察している。

貨幣が今まで貨幣として使われてきたということによって、

貨幣が今から無限の未来まで貨幣として使われていくことが期待され、貨幣が今から無限の未来まで貨幣として使われていくというこの期待によって、貨幣が今ここで現実に貨幣として使われる——すでにあらかただろう、貨幣の存立をめぐるこの因果の連鎖の円環こそ、商品語から人間語に翻訳されたあの貨幣形態Zの無限の循環論法にほかならないのである。この円環が正常に回転しているかぎり、貨幣は貨幣でありつづけ、その貨幣を媒介として、商品世界が商品世界としてみずからを維持していくことになる。

だが、これはなんと危うい円環なのだろうか。⁽³⁷⁾

(岩井克人『貨幣論』)

岩井によれば、貨幣が現実に貨幣として存在しているのは、未来において確実に誰かがそれを貨幣として受け取ってくれるという、「宙ぶり的な期待」に支えられているからに過ぎないのだという。従って、ある日突然、「最後の審判のラッパ」が鳴り響いたとき、貨幣は貨幣であることを止め、単なる金属のかけらや紙のきれはしや電磁気的なパルスとして、その輝きを失ってしまうことになるのである。

貨幣を喰って生きる「しやりつこ」の親子は、貨幣と商品の無

限の交換によって成り立つ貨幣経済社会においては異端児である。しかし、貨幣経済の末端にはじき出された親子こそが、むしろ貨幣経済の本質を極度に肥大させた異形の者として、その不条理を暴き出しているとはいえないだろうか。貨幣経済社会においては、食物を食べるため、生きるためには、否応なくその巨大なシステムの中に取り込まれなければならない。その意味で、人間は誰しも貨幣を食べて生きていくのだといえるだろう。貨幣を食物として取り込むことができるようになってしまった親子は、貨幣経済社会に生きなければならない人間の哀しい姿でもあるのだ。「しやりつこ／しやりつこ」という硬貨が腹の中で擦れ合う音は、貨幣経済社会の深淵で、切実なりアリテーを持って不気味に響いているように。

一九五八年七月八日付の『国際新聞』には、アパッチ部落を取材した、次のような記事が掲載されている。

ときには金や銀も掘り出されるといふ伝説に夢を持つこともあるが、彼らの一貫して変らぬ信念は「決してわれわれは悪事を働いてゐるのではない」といふことだ。「もちろん法に触れる行為かもしれないが、このままほっておけばどう大な国家の資源が人目のつかぬ地下でくさり果ててしまっただけ

はないか。われわれが掘り出してこそ多くの鋼材は目の目を見、再生され、鉄鋼としてどこかで立派に役立つ」といふ。むしろ誇りに似たものさえ持っている。

(「アパッチ部落に潜入」)

アパッチ族が言うには、国家の財産を「盗む」という不法行為は、埋もれていた財産を掘り起こして再生してやることで、むしろ国家の役に立っているのだという。ここで展開されるアパッチ族の奇妙な論理には、国家に対する倒錯した反逆が潜んでいる。元手のかからないくず拾いを生業とする「しやりつこ」の親子は、貨幣経済の外側で儲けをはじき出しているのだといえる。しかし、親子は拾ってきた金属を貨幣に交換することで、貨幣経済に参加する。それにも関わらず、親子は貨幣を商品との交換には使わず、直接腹のなかに入れてしまうのである。場外から乱入して貨幣をかすめ取り、そのうえ貨幣を返還しようとしぬ親子は、貨幣経済社会においては「異邦人」である。それは、貨幣経済の「無限の循環論法」(岩井克人)を停滞させてしまう危険な存在だ。さらに年老いた夫婦は、貨幣を喰いつづけた末に、それがいつか「黄金」に変わることを夢見ている。「黄金」は、貨幣経済社会においては直接的に交換に関わることはないが、一方で「黄金」は

やはり不変の富として、いつでも貨幣に交換することができる。「硬貨」を喰って「黄金」を産み出す錬金術は、経済システムの末端に貶められた「しやりっこ」の夫婦が秘かにしかける、貨幣経済社会への復讐であつたのだ。

「しやりっこ」の夫婦は、おなかの中に「また誰にも／掘られた」ことのない金鉱を秘めているのだという自負を持っている。夫婦の他愛のない空想は、あらゆるものを根こそぎ奪われ通した者が保持しうる、唯一の意地と誇りであつたのではないだろうか。その豊かな空想は、誰にも荒らされることのない領域として、夫婦のなかに厳然と存在しているのだ。実際には「四十年」もの間「便秘」を抱え、「二人／くろくろ／横に／なる。」ことで、またしても一日が徒労に終わっていく。しかし、貨幣経済社会において異形の者として非人間的に変形してしまつた夫婦は、いつかきつと、腸の蠕動運動という生物学的な力によって、その停滞した時間を解放していくはずである。³⁹⁾

おわりに

このように『日本風土記Ⅱ』には、のちの『猪飼野詩集』（構造社／一九七八年八月）へとつながっていくような、猪飼野群像

が生き生きと息づいている。一口に在日朝鮮人といっても、世代、性別、職業、日本に在住することになった経緯などは様々である。それを集合体としてのみとらえたとき、一人ひとりの豊かな表情は光を失うだろう。だが一方で、雑多な日常を個々ばらばらに描くだけでは、生活の記録とはなりえても、文学としての創造性はおちえない。これに対して金時鐘が模索したのは、ズームレンズを駆使して近景と遠景を同時に描き込む手法であつた。金時鐘は、普通は見過ごしてしまいそうな細部にまで降り立ち、具体的なエピソードを積み重ねてそれぞれの在日朝鮮人の表情を浮かび上がらせる。一方で、在日朝鮮人をとり巻く日本の、あるいは国際的システムを構造的にとらえ、その矛盾を鋭く暴き出すのである。⁴⁰⁾

金時鐘が激しく希求するのは、統一体としての朝鮮である。しかし現実には、朝鮮半島は南北に分断され、互いのイデオロギーによって対立している。従って、どちらか一方のイデオロギーに加担する思考からは、それをどんなに発展させようと、対立を融和へと導く視点は産み出すことはできないだろう。必要なのは、二項対立的な思考ではなく、対立項を等距離に眺めることのできる思考なのだ。在日朝鮮人は、共和国・韓国・日本の谷間に落ち込んだ、いずれでもなく、しかしいずれでもある存在である。そこにこそ、金時鐘が立ち上げようとした、在日として生きること

の積極的な意味があったのだ。『日本風土記Ⅱ』は、「在日」という場を突きつめ、表情豊かに照らし出した詩集なのである。

『日本風土記Ⅱ』目次・収録作品書誌

※『日本風土記Ⅱ』の目次と、現時点で判明している掲載書誌を

左記に記した。『日本風土記Ⅱ』の目次は二種類あるが(上)

参照、本稿では野口豊子「金時鐘年譜」(『原野の詩』)所収の「目次の控え」に拠った。

尚、「拾遺集」所収のものには「○」、不明のものには「▲」を付した。

I 見なれた情景

○「カメレオンのうた」(『ヂンダレ』一七号／一九五七年二月)

「種族検定」(『カリオン』創刊号／一九五九年六月)

○「齒の条理」(『新日本文学』／一九五八年一月)

「労働昇天」(『詩学』／一九六〇年八月)

○「穴」(『現代詩』／一九五八年四月)

「目撃者」(『国際新聞』／一九五六年一〇月三〇日)

「木綿と砂」(『国際新聞』／一九五八年七月二五日)

「哄笑」(『現代詩』／一九五六年八月)

▲「夜の磁気」

○「海の飢餓」(『現代詩』／一九五九年五月)

「わが性わが命」(『カリオン』二号／一九五九年一月)

II 究めえない距離の深さで

▲「二つの部屋」

▲「遺品」

○「雨と墓と秋と母と」(『ヂンダレ』一九号／一九五七年二月)

○「犬を喰う」(『ヂンダレ』一九号／一九五七年二月)

「究めえない距離の深さで」(『詩学』／一九六一年一月)

▲「早い季節」

「秋の夜に見た夢の話」(『国際新聞』／一九五五年一月一九

日)

▲「冬」

「春のソネット」(『国際新聞』／一九五六年三月三日)

▲「この地に春がくる」

「春はみんながもえるので」(『詩学』／一九五八年六月)

▲「ぼくらは一日をかちとった」

○「しやりっこ」(『ヂンダレ』二〇号／一九五八年一〇月)

「籤に生きる」(現代詩和歌山研究会『詩 ANTHOLOGY1958』

／一九五八年八月)

▲「ぼく」

▲「二十五年」

『道』(『読売新聞(大阪版)』夕刊/一九五九年六月二三日)

「檻を放て！」(『国際新聞』/一九五八年三月二日)

注

- (1) 『日本風土記Ⅱ』の成立背景、刊行が頓挫した事情、詩集復元の経緯などについては、(上)の注で詳述したため、本稿では割愛する。
- (2) (上)及び本稿では、特に『新潟』との連続性に主眼を置いて論述した。今回は考察できなかったが、『日本風土記』との連続性も重要である。特に以下の点において、『日本風土記Ⅱ』は『日本風土記』を引き継いでいると考えられる。
- ・『日本風土記Ⅱ』というタイトル。
 - ・既発表の短編・中編詩を、二部に分けて配置することで、主題を導くという点。これは、第一詩集『地平線』・第二詩集『日本風土記』から一貫してとられている構成である。
 - ・ありふれた日常の光景を通して、『日本風土記』という場が孕む矛盾を浮かび上がらせるという手法。
 - ・生き物への親和性。
- (3) 「檻を放て！」は、大村収容所をモチーフにした作品である。『日本風土記Ⅱ』を締めくくるこの作品を、どう読み、位置づけるべきなのか、本稿では明確な結論を得ることができなかった。特に、「海の向こうの／北」に関して、北共和国そのものを指すのか、それとも「現実の共和国(朝鮮民主主義人民共和国)への違和そのものとして」示される「理念であり、優れた意味での暗喩」としての「北」

(※1)を指すのか、今後の課題としたい。「檻を放て！」の全文を、以下に引用する。

《お前の退化を待っている。／そこらじゅう／羽毛をまきちらし／はげしく檻にいどんでいる／お前の退化を待っている。／人は知らない。／お前がもう／お前でないとき／人は食欲をそそられるだけ。／羽。／首。／体。／大村収容所。／森でない森の／異様な静けさの中で／飛び立てない父は／むしられたまま／死んだ。／野に逐ち／海に消え／なおはばいたいく羽かが／つながれたまま／もとの沼地へと引かれてゆくのだ。／人よ。／まとも生れ変わった日本なら／檻を放て！／この地の足場から／彼のはばたく先は／海の向こうの／北にある。》

※1 細見和之は、『新潟』に登場する「ぼくこそ／まぎれもない／北の直系だ！」(Ⅲ 緯度が見える③)という一節について、この叫びによって金時鐘は「当時の朝鮮民主主義人民共和国、韓国、日本の現状すべてにたいする、決定的な違和を表明」し、「もつと自分の足元、あるいは自らの感性の奥底に沈んでいるはずの『北』を提示している」と指摘している(細見和之「吉本隆明と金時鐘—来たるべき『戦後』の到来のために」／『唯物論研究』/二〇〇七年二月)『ディアスポラを生きる詩人 金時鐘』／岩波書店/二〇一一年二月)。

(4) 『道(洪じいさん)』が掲載されている同じ紙面には、「日朝友好」のきずなに、「熱心に母国語勉強」、「黒板をみつめるまな差しはもう北朝鮮までとんでいる」、「『第二の故郷です』 徹しい差別の中に忘れられない「善意」といった見出しが並んでいる。

高崎宗司・朴正鎮編『帰国運動とは何だったのか』封印された日朝関係史(平凡社/二〇〇五年五月)には、帰国問題について考察した共同研究の成果が収められている。本書は「I 帰国運動とは

何か」・Ⅱ誰が帰国運動を推進したのか」・Ⅲ帰国運動はどう報じられたのか」の三部から構成されており、そこで議論をふまえたうえで、朴正鎮は次のように述べている（『拉致』と『帰国』の間で―編著者あとがきに代えて）。

「帰国第一船の出港を描いた新聞を見ると、当時は「感激と希望の北朝鮮行き」というスローガンが違和感なく受け入れられる時代であったことが、誰でも読み取れる。当事者であった在日朝鮮人をさておいて、数多くの日本人が、左と右を問わず帰国運動を支持し、また直接に参加していた。「北鮮」の代わりに「北朝鮮」という表現が登場していることも確認される。日本政府も「帰還事業」を敢行したことを人道主義的決断として自負し、国際社会もそれに異議を唱えなかった。例外は韓国だけであった。現在の北朝鮮問題をめぐる周辺国の反応、とりわけ日本社会での北朝鮮イメージからすると、正反対の状況が繰り返られていたのである。」

(5) 「帰国事業」は、共和国及び朝鮮総連が主体的に推し進めたとする見解が一般的であろう。だが、テッサ・モリス・スズキの調査は、在日朝鮮人の共和国への帰国には、冷戦下の大国の様々な政治的思惑が働いていたことを論証している。テッサ・モリス・スズキはそのような大国のパワーゲームを明らかにしつつ、「なぜあれだけの人たちが北朝鮮に行ったのか？そして、彼ら、彼女らがほんとうに望んでいたのはなんだったのか？」という問いのもと、自らの強い決意によって「帰国」を選択した朝鮮人のそれぞれの物語を丹念に掘り起こしている。（テッサ・モリス・スズキ／田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス「帰国事業」の影をたどる』／朝日新聞社／二〇〇七年五月）

(6) 御堂筋の道路拡張工事が開始されたのは一九二六年一〇月である。同時並行的に、一九三〇年一月には地下鉄御堂筋線の第一期工事が

開始されており、一九三三年には梅田―心齋橋間の営業を始めていく。

「洪じいさん」の言葉にある「こゝら辺の土管」とは、地下鉄のトンネルのことであろう。ただし、詩中の現在は一九五九年の「初夏」であり、「大阪へは／三十年ぶりだな」と記されているので、一九三〇年着工の地下鉄御堂筋線の工事とは微妙に時間のずれがある。しかしここでは、「三十年ぶり」を日常のあいまいな表現としてとらえ、「洪じいさん」が従事したのは地下鉄御堂筋線の工事であると推定した。事故に遭って足の指を失った「洪じいさん」は、工夫を続けることができなくなって大阪を去り、「帰国者大会」が開かれたこの日まで数々の苦勞を負いながらも食いつなぐことができたと思像される。

(7) 地下鉄御堂筋線の工事の様子は、次のように記されている。

「地下鉄工事も難関の連続であった。路線予定地は、土を少し掘ると水がわき、土質は細砂で崩れやすい、トンネル工事にとって困難な場所が多かった。このために、ドイツから輸入した四トン蒸気ハンマーで鋼矢板を深く連続して打ち込み、土の崩れを防ぎながら掘削作業が進められた。蒸気ハンマーが発する騒音・振動はさまざま、付近の家が傾き、壁が崩れ、地下水がかれたといわれている。四つの川の河底を掘削する作業も、難工事であった。長掘川は水を全部締め切って工事を実施し、堂島川・土佐掘川・道頓堀川は半分締め切り、トンネルを真ん中でつなぎ合わせた。事故も発生した。昭和六年四月には土佐掘川の締め切り部分が決壊し、道路の一部が川中に没して市役所前以南の市電が不通になった。八年三月には長掘川横断部で、締め切り用の鋼矢板のすき間から漏水し、トンネル内に侵入して一部は完成間近い本町停留場にまで及んだ。最大の事故は、十一年二月に発生した梅田停留場基礎部分の崩壊であった。」

この事故によって、二人が圧死し、七人が負傷した。》(芝村篤樹『第一章 都市政策の展開』／新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第七卷／大阪市／一九九四年三月)

(8) 姜在彦は、「在日韓国・朝鮮人は、一九一〇年八月からはじまる日本の植民地支配の歴史的産物」であり、すでに日本人の一構成要素となっている前近代における渡来人や朝鮮人俘虜およびその子孫たちと、「近代における在日朝鮮人とは、質的にその性格を異にする」と指摘している。当時の統計資料などを用いた姜在彦の調査によると、日本が韓国を併合する前年の一九〇九年の在日朝鮮人は七九〇名で、そのほとんどが日本留学生であり、しかも一時的な在留者であった。しかし、日本の植民地支配を背景に「農民層の没落による渡航過程(一九一〇〜三八)」、「強制連行による渡航過程(一九三九〜四五)」を経た、解放前の一九四五年五月の推定では、在日朝鮮人の人口は二一〇万人に達した。前者の渡航過程では八〇万人近い朝鮮人が日本にやって来たのだが、植民地期の経済政策によって土地を追われた農民が、日本資本主義に低賃金労働者として吸い上げられるという、歴史的・社会的背景による「自由渡航」であった。一九三〇年頃に「御堂筋」の工事に従事した「洪じいさん」もまた、このような背景によって日本に渡って来た人物であると考えられる。(姜在彦・金東勲『在日韓国・朝鮮人―歴史と展望』／労働経済社／一九八九年九月参照。)

(9) 『新修 大阪市史』(注(7)に同じ)は、一九一九年に提出された大阪市の市区改正部の案を引用したうえで、「御堂筋は、南北幹線道路として交通運輸を円滑にするためばかりではなく、大阪の顔を形成するという目的の下に計画され、「御堂筋と地下鉄は、ともに近代都市大阪の中心軸となるべきものであった」ことを指摘している。

(10) 「二万の夜と日」は約五五年であり、詩集が書かれた頃(一九六〇年前後)からさかのぼると一九〇五年(在日朝鮮人の起源)となる。金時鐘は、「在日という僕の認識の中には三つの範疇がある」という。まず、強制連行や徴用、徴兵によって「日本によって切りとられてしまった」人たちの存在がある。そして、「日本から引き離されてしまった」人たちとして、解放後に祖国の再建に勇んで帰って行き、そのために家族がばらばらになってしまった存在がある。最後に、金時鐘自身がそうであるように、「日本に引き寄せられた」者として、「かつて日本国民であったものが、またもや絡めとられるように日本という存在自体に引き寄せられた」存在がある。金時鐘は、「それらをひっくるめて、在日だと考えているんです」と述べている。(金時鐘・尹健次『在日』を生きる)／『環』第一一〇号／二〇〇二年秋) ↓(金時鐘『わが生と詩』／岩波書店／二〇〇四年一〇月)

(11) 滝本明は、従来の道の意味を否定するという規制(すなわち世界否定)を自らに課したとき、「イメージは、もつとも初原的な、光をさけて土中に道をつくってゆく生物に自分をつきおとしてゆく展開をもつ」と指摘し、『新潟』を「自らの(変身譚との闘争)Ⅱ(環境抵抗との闘争)のプロセス」として位置づけている(滝本明「意味と不在の国境―金時鐘における長編詩の構造」『文学学校』／一九七九年八・九月合併号)。

(12) 『新潟』に描かれる「道」として、「みみず」、「新潟」・「雁木道」・「海」の四つの大きなモチーフがある。

- ・滝本明や細見和之が指摘するように、道のない土中を掘り進む「みみず」そのものが「道」の暗喩である。
- ・「新潟」は、信濃川と垂賀野川の河口の中州に新しく形成された潟湖から、「新しい潟」の意味づけられた地名であるという。

また、新潟には朝鮮半島を分断する三八度線が走っており、さらに共和国への帰国船が出たのもこの地である。梁石日が指摘するように、「詩のタイトル『新潟』は単なる地名ではなく、優れた暗喩（梁石日『北』へ開かれた地に焦点）／『新潟日報』／二〇〇一年四月一八日）である。また詩中では、新潟で実際に行われた工事や、地形発達などが、自然と人間が織り成す「道」として豊かに描かれている。

・『雁木道』とは、雪深い地方で冬に歩行者の通路を確保するために考えられたもので、庇を長く張り出しその下を歩道として提供するという仕組みである。空を飛ぶ雁の姿に似ていることからこう呼ばれる。金時鐘は雁木道について、「行き着けない国を思い、豪雪地帯でも道を保っている雁木道の、持ち寄った知恵の意志力を思」つたと述べている（金時鐘「祖国はるか国境の新潟―長編詩『新潟』創作から40年」／前掲『新潟日報』）。

・『新潟』では、四・三事件や浮島丸事件、朝鮮人の日本への渡航、共和国への帰国など、全篇を通して「海」が重要なモチーフになっている。

(13) 「ぼく」と「あなた」は「同族同志」であるという表現に加え、以下の二点の描写から、「あなた」は在日朝鮮人一世の女性であると推定できる。まず、金時鐘は「石臼ほどの骨盤」を在日朝鮮人女性の表象として用いている（※1）。さらに、荷物を車内に残してホームに取り残された「あなた」の叫び「かえせーかえせー」は、ひらがな表記によって一世の訛りが表現されていると考えられる（※2）。

※1 例えば、在日朝鮮人の生活をうたった「見えない町」（『猪飼野詩集』所収）では、「そのせいか／女のつよいつたら 格別だ。／石うすほどの 骨ばんには／子供の四、五人 ぶらさがっている

て／なんととはなしに食っている／男の一人は 別なのだ。」とある。

※2 例えば、次の詩ではかたかな表記によって一世の訛りが表現されている。「ついにそぐうことなく／半可な国訛りで老いてしまった／集落止まりの日陰の日本語よ。／ホトケーホトケー／かまわないでと言ったのか／ホトケさまア、と叫んでいたのか。」（空隙『失くした季節』）

(14) 猪飼野の主要産業である「ゴム長」（※1）を売って、「白米」を手に入れた帰りの出来事であったと推察される。解放後、厳しい差別と生活苦のなかで、なかなか仕事にありつかなかった在日朝鮮人は、遠くまで買い出しにでては、闇市でそれを売ってなんとか生活を維持していたという。在日一世の金盛吉による以下の証言には、当時の様子が生々しく語られている。「海の飢餓」に登場する「あなた」も、おそらくは同様の体験を積み重ね、生き抜いてきたのだろう（ただし、終戦直後の状況を語ったこの証言と、一九五九年五月に発表された「海の飢餓」とは、少し時代がずれており、日本人との関係にも微妙な差がある。これは、「海の飢餓」の主題とも大きく関わる。）

《終戦後いうたら、何もあれへんねん。そやから田舎からみんなもって来て、大阪で売る訳や。大阪にあるものを買って田舎に持って行って売る訳や。私はあのゴム靴あるやろ。今はなんぼでもあるけれども昔は仲々ないねん。ゴム靴とか、長靴とか、直足袋とか、そういうものが昔は全然ないねん。あつても出せへんねん。闇市で売るつもりや。それで私らが直接、工場へ行つて、そこで安くうって田舎へ持って行って田舎の靴屋に依託販売さす訳や。何百足持つていって『これを売ってくれ！』と。むこうも欲しがってるから、百姓するとはみんな長靴欲しがってるからな。だから、大阪で買う

て「秋田」とか「山形」とかに行つて、靴屋へ依託販売させて、売れたら金をもらう訳や。それも何軒も頼んでおいてな。そうして帰りは米を買うて帰つてくる訳や。その時は、みんな配給やろ、豆とか麦とか南バキビ（トウキビ）を潰した奴とかを米や麦に混ぜて配給してくれた。米なんかはほとんどあれへん。そやから、「山形」や「新潟」へ行つて米買うて、背中に背負つてもつてくる訳や。きびしいよ！捕つたら最後や！捕つた人間もようけおつたけど、仲々朝鮮人は捕まらんかった。かえつてこっちがメチャメチャにしもつた。それで汽車にのる時でも、なんぼでもタダで乗つた。例えば大阪―京都のキップ一枚を買うやろ、それで向こうまで行つてしまふ。それから駅の出口から出ないで横から出てしまふ。向こうからこっちへ来る時と同じや。当時はみんなそうしとつた。今みたいに車掌なんか、まわつてきいひん。第一、列車の中は通られへん。もう人間と荷物がかさなつて座つてる。トイレの天井荷物がいっぱいや。そやから、トイレできひんから窓聞けてした。出入りも窓からや。ガラスもあれへんし、冬になると寒むうて寒むうて、たまらんかった。／列車がホームに入つて来たら朝鮮人が、先順番に並んで置くねん。ホームにずうと朝鮮人が何百人と並んだもんや。中国人も別に並んどつたな。そしてホームに入つてきたら、みんなかつてに乗るんや。もうムチャクチャや。《金盛吉の証言「仕事いうても何もあれへんねん」／「成合における在日朝鮮人の生活史」合同編集委員会編『こんなんして生きてきたんや―成合における在日朝鮮人の生活史』／在日朝鮮人サークルむぐげの会／一九八〇年三月）

※1 一九二〇年代とくに後半、大阪市東成区は、都市化・工業化に向けての基盤整備が進行すると共に、化学および金属・機械器具工業を中心とする中小零細工業が叢生し、工場数では大阪市全

区のうちで最多を示していた。この中で猪飼野地域は、靴製造を中心とし、経営規模では全国水準はもとより大阪市の平均をも下回るような零細なゴム工場の密集地帯として、一九三〇年代初頭には、大阪ゴム工業の中核たる地位を占めるに至つたのである。》（杉原達「越境する民 近代大阪の朝鮮人史研究」／新幹社／一九八八年九月）

(15) 「種族検定」(『日本風土記Ⅱ』収録予定、(上) 参照) には、「潜在性B1欠乏症による多発性神経炎とはつまりなにか、／瑞穂の国の白米を食いすぎたつてわけだな?! /かもしれん。／俺の発育期の朝鮮に米がなかつたことだけは事実だ。」という一節がある。また、金時鐘はエッセイにおいて、次のように述べている。「白米」は、日本の植民地支配による収奪を連想させるモチーフである。

《昔も今も、日本の恩恵がましい(朝鮮)への投資には、必ずと言っていいほど、不気味な飢えが「近代化」とともにまといつてきた。／(中略)／零細な農民のなげなしの耕作地は、まるで吸塵機にでも吸い取られるように朝鮮植民者の日本人の手中に収められ、一部の親大地主だけが余得にありつけるという、植民地収奪の相貌をむきだしにした。日本本土へ「産米増殖」によつて積み出した米の量は、実に息を吞むばかりの巨大な量である。一九三三年の一年をとつてみても、全産米量の半分を超える八百七十万石が日本本土向けとなつてゐる。「飢餓輸出」という、文字通りの言葉につきる。／かくて朝鮮人の流浪離散は宿命にまで成り変わった。「在日朝鮮人」はこの時期、急速に増大し、『日本においても膨大な失業群を形成した』彼らは、鉱山、鉄道、土木工事などの現場で、日本人労働者の六割にみたない低賃金にしがみつき、骨のきしむ重労働を生身であがないうづけたのだつた。》(金時鐘「かさなる陰面―日本企業進出下の韓国の風景」／『朝日新聞』／一九七四年二月二〇

日) ↓ 『さらされるものとさらすものと』 / 明治図書出版株式会社 / 一九七五年九月) ↓ 『在日』のはざままで / 立風書房 / 一九八六年五月 ↓ 平凡社ライブラリー / 二〇〇一年三月)

(16) 金時鐘「朝鮮人の人間としての復元」(同志社大学神学部特別講座の講演録 / 一九七一年一〇月一四日) ↓ (前掲)「さらされるものとさらすものと」 ↓ (前掲)『在日』のはざままで』

(17) 「大都会の／消化気官」という表現は、車内に「散乱した白米」のイメージとも連動している。闇米と思われる「白米」が、飢えた乗客の前に散らばっており、満員の乗客を詰め込んだ電車が、あたかも「消化気官」を持った生き物であるかのようにうなりをあげている。

(18) 「わが性わが命」については、(上)で考察した。

(19) テッサ・モリス・スズキ『北朝鮮へのエクソダス』(注(4)に同じ)。

(20) 金時鐘は、一大事業として推し進められる在日朝鮮人の帰国については、懐疑的な立場をとっている。その一方で、帰国開始直前に刊行された『カリオン』創刊号(一九五九年六月)において、次のようにも主張している。

《第一に「人道主義」を押し売りしようとする日本の一部世論創作者たちの、そのお為ごまかしの表看板をとりはずしてもらいたい。在日朝鮮人の帰国問題が、そのような方便の産物であつていいはずはないのである。半世紀にわたつて、たつたの一度だつて省みられたことのないわれわれ在日朝鮮人の主権を無視して、今更「人道的処置」もあつたものだろうか？ それもそのような無権利状態に押しやつた張本人たちの口をついて出るヒューマニテイだけに、早急に帰国船が出るまでは、マユツバものである。何もかもしやぶりつくされた者が、長年かろうじて保存してきたたつた一つの主権を行使

するのである。われわれは帰らせて「頂く」のではない。われわれは祖国、朝鮮民主主義人民共和国へ「帰る」のである。》

(21) 鶴飼哲は、金時鐘(の詩)に「詠嘆のポリテイクス」を見てとっている。鶴飼によると、金時鐘に大きな影響を与えた小野十三郎が「徹底的に『詠嘆』と対極的な詩語を磨き上げたのに対し、金時鐘詩には外見上『詠嘆』の異形とも見える表現が散見される。それらの表現には、しかし、『詠嘆』の高次化による政治化とも呼ぶべき特異な操作が組み込まれている」という。「ただ、それを正しく聞き取るには詩と散文を含めた彼の膨大な作品中の公然、隠然のすべての『ああ』を、ひとつひとつ、正確に読み解く忍耐が必要だったのだ。無気力に洩らされた嘆息はひとつとしてない。そこではつねにもっとも深いブルースの響きが、明晰な批評性と溶け合っている」という鶴飼の指摘は、金時鐘を読み解くうえで非常に重要である(「詠嘆のポリテイクス―初期詩編雑感」 / 『季刊 びーぐる 詩の海』第四号 / 二〇〇九年七月)。

(22) 「労働昇天」は、一九六〇年八月刊行の『詩字』に発表された。『日本風土記Ⅱ』に収録される予定であったが、詩集の刊行が頓挫してしまつたため、後に『猪飼野詩集』に収録されることになつた(金時鐘「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」参照。(注(23)に同じ)。「猪飼野詩集」(東京新聞出版局 / 一九七八年一〇月)は、『季刊三千里』創刊号から一〇号まで、一〇回にわたつて連載された詩篇を中心に編まれた詩集である。「労働昇天」は、『季刊三千里』九号(一九七七年二月)に、「果てる在日(3)」として再録されている。

「労働昇天」は、十数年を経た後に、『猪飼野詩集』という大きなテーマを持った連載詩の一部として再録されたため、それに合わせて大きく改稿されている。主な改稿箇所は、以下の通りである。但し、

『労働昇天』は五パターンあるが(※1)、ここでは初出版と『季刊三千里』版の異同のみを記す。

①タイトル「労働昇天」↓「果てる在日(3)」、②「自走砲となつたうつぶつたる憤懣が」↓「うつぶつたる憤懣は鋭角な自走砲の弾丸となり」、③「ただ殺す。」↓「ただ潰す。」、④「これで手廻しミシンのプリーが廻る杜組となつている。」↓「いきおいプリーンは／ハンドルの強制に音をあげる仕組みだ。」、⑤「トルコ、イラン、パキスタン」↓「マレー、タイ、インドネシア、イラン」、⑥「すでに八十年。」↓「すでに九十年。」、⑦「殺せ！」↓「消せ！」↓「潰せ！」、⑧追加「ポーナスもない。／産休もない。／労災もなければ／ソウヒョウもない。／残業だけが／新年になる／そんな歳月の炸裂だ！」、⑨「三十分のうちに」こを出た。」↓「五十分のうちに」こを出た。」、⑩「日夜歯と歯を噛むみあわせるイメージに自足してゆく／創造社を見るのである。」↓「歯と歯を噛み合わせるだけの時を／奴は日夜撃つていねばならないのである。／このとき／日は／うそさむくも／胴体のあわいからすり抜けるのだ。」、⑪追加、末尾に「労働昇天」と記されている。

※1 ①『詩学』(一九六〇年八月)、②『季刊三千里』九号(一九七七年二月)、③『猪飼野詩集』(東京新聞出版局／一九七八年一月)、④『集成詩集 原野の詩 1955～1988』(立風書房／一九九一年一月)所収の「猪飼野詩集」、⑤『金時鐘詩集選 境界の詩 猪飼野詩集／光州詩片』(二〇〇五年八月／藤原書店)所収の「猪飼野詩集」。

(23) 金時鐘『幻の詩集』日本風土記Ⅱ復元に向けて(「インタビュー」)
金時鐘・姜順喜(聞き手／細見和之・浅見洋子)／『イリプスⅡnd』第七号／二〇一一年五月

(24) 金時鐘は、「あんとさ僕も食いつめて、家内の親父がやっていた小

さい町工場で、前近代的な手回しミシンのプリーン作るのに一時ちよつと働いた時期があつてね」と述べている(金時鐘『幻の詩集』日本風土記Ⅱ復元に向けて)(注(23)に同じ)。

(25) 金時鐘は、「労働昇天」について「そのときはテロという言葉が社会的になかった時代だけど、僕はテロ意識をずっと鬱々と持つたな。」と語っている(金時鐘『幻の詩集』日本風土記Ⅱ復元に向けて)(注(23)に同じ)。

(26) 冷戦下、アメリカはソ連に対する集団防衛を強化させるため、世界の国々と同盟関係を結んでいった。それは、「ヨーロッパ、中東、アジアを一つの輪で繋ぐ、地球的な反共防衛の『鉄の壁』(大森実『激動の現代史五十年 国際事件記者が抉る世界の内幕』／小学館／二〇〇四年六月)といえるものであった。アイゼンハワー政権で掲げられた大量報復政策(ニユーロック戦略)の問題点を補うために、アイゼンハワー政権の安全保障政策においては、トルーマン前政権にも増して同盟が重要視されるようになった。一九五三年一月二十九日の国家安全保障会議文書NSC162/2は、「米国は同盟国の支持なしではその防衛の必要を満たすことはできない」と指摘しており、アイゼンハワー政権は韓国・台湾と相互防衛条約に署名し、東南アジア条約機構などにより外交、安全保障の同盟関係をアジア、中東などに拡大した。(浅川公紀『戦後米国の国際関係』／武蔵野大学出版会／二〇一〇年一月月参照)

詩中の「トルコ、イラン、パキスタン」は、一九五九年三月にアメリカとパキスタン・トルコ・イランとの間で結ばれた各相互防衛協定を、「台湾、韓国」は、一九五四年二月に結ばれた米華相互防衛条約、一九五三年一月月に結ばれた米韓相互防衛条約を指していると考えられる。

(27) 金時鐘「差別の醜と解放への道(上) 金時鐘氏を迎えて」(鼎談)

金時鐘・野間宏・安岡章太郎『朝日ジャーナル』／一九七七年四月一日（五日）↓（野間宏・安岡章太郎編『差別・その根源を問う（下）』／朝日新聞社／一九八四年四月）

(28) 「I 雁木のうた②」が収録されている『新鴻』は、金時鐘の証言によれば、一九五九年頃に書き終えられていた詩集である。しかし、当時金時鐘は組織から厳しい政治的批判を受けていたことから、実際に詩集が刊行されたのは一九七〇年八月である。

(29) 金時鐘「盲と蛇の押問答―意識の定型化と詩を中心に」（『チンダレ』第一八号／一九五七年七月）。このエッセイは、「多くの『愛国的行為』を置きざりにして、新しい型の愛国心」を強いる組織の犠牲となった、「詩における自殺者」の「遺書」という形で書かれている。このエッセイでは、以下のような主張がされている。

《それで、私は努めて云語の移植ということを試みてみましたが朝鮮の詩らしい詩は一向に書けませんでした。私の煩悶はここから始まったと云つていいでしょう。なぜなら『朝鮮人』という総体的なものの中へ、一個人である自分が自分というもののもつ特性を少しも加味しないまま、いきなり飛びついているからです。私はその前に、まずこういうべきでした。「私は在日という副詞をもつた朝鮮人です。」私は、国語を意識的に朝鮮語であると云い聞かされることによつて、朝鮮語が国語になつていきます》

《詩を書くということ、愛国詩を書くということは、まったくもつて関係がない。日本語の詩を書くからといって、国語の詩に気がねをする必要は少しもない。「在日」という特殊性は、祖国とはおのずから違つた創作上の方法論が、こちらへんで新しく提起されてこなくてはならないと思う》

(30) 『金時鐘年譜』（野口豊子編・『原野の詩』所収）には、一九五八年一月の項に、「この頃、開高健が『アパッチ』取材のため来阪」と

記されている。「道（洪いさゝん）」（本稿第二章第一節参照）の初出紙には、著者紹介として「土工、店員、はてはアパッチに身を投じながら詩を書きつづけている」と記されている。また、鄭仁（金時鐘と『チンダレ』、『文学学校』／一九七九年八月・九月合併号）には、次のように記されている。

《組織の現場から切れてゆく時間の経過のなかで、もだいがたい精神的孤立感を自己制ぎよ出来ず、情緒的にも不安定であった、金時鐘の私生活は大いに荒れた。当時、森之宮と京橋駅のあいだにあった、元兵器工場跡の広大な敷地に眠っている鉄塊を、夜陰にまぎれて掘り起こし、生活の糧にしていた、「アパッチ」と呼ばれる集団があった。金時鐘も一時その集団に加わつたことがある。黒装束に身をかためて、もつと言え、収束しきれない想像力に身をかためて、勇躍夜の原野へ出陣するのだが、それはきままつて徒勞に終わる。（中略）多分くろくろとした闇の中をいたずらに徘徊すること、その徒勞と緊張の時間こそが、金時鐘の生の感覚であつたのかも知れない》

細見和之は、開高健『日本三文オペラ』・小松左京『日本アパッチ族』・梁石日『夜を賭けて』というアパッチ族をめぐる一連の小説に対し、金時鐘の独自性は「アパッチ族をめぐる歴史的背景・社会的背景などいつさい捨象して、鉄屑から黄金を文字どおり捻出するしたたかな庶民の錬金術を、『しやりっこ、しやりっこ』という繰り返されるユーモラスなリズムのもとに描きだしているところにあるだろう」と指摘している（第二章『日本風土記』と幻の『日本風土記II』の作品世界（書き下ろし）／『ディアスポラを生きたる詩人 金時鐘』／岩波書店／二〇一一年二月）。

(31) 当時の新聞によると、この時期、アルミの需要が急速に伸びていたようである。また、アルミ需要の増加は、日本の「経済成長」や「消

費生活の向上」と結びつけて捉えられていたようだ。

《アルミニウムの「成長性」がこのところ改めて見直されている。戦後アルミニウムの需要は毎年一割ぐらいずつ伸びてきたが、最近はそのテンポが一段と早くなり、昨年など不況で金属類の生産が大幅に減ったのに、アルミだけは二五%も生産がふえた。今年もひき続き好調で、上半期のアルミ地金生産は昨年同期の二一%増、年間では待望の十万吨の大台に確実に乗せそうだ。／このようにアルミの需要が伸びているのは、最近の家庭電気器具ブームによるところが大きい。もともとアルミはナベ、カマなど日用品の需要が多く、戦前はザツと半分もこれが占めていたが、消費生活の向上にとともに、各種電気器具にとつて代られつつある。／また次に多い大きいのが交通機関への利用。軽量化とスピード・アップのため、鉄道車両、自動車船などに広く使われはじめた。さらに送電線や各種の包装、容器への利用もふえている。建築では大阪の新朝日ビル、建築中の東京日比谷の三井ビルなどがアルミ利用の代表建築だが、むしろ来んの呉の伸びが期待される。》(『朝日新聞』／一九五九年七月二六日付)

- (32) 金時鐘『幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて』(注(23)に同じ)。
- (33) 岩崎爾郎『物価の世相一〇〇年』(読売新聞社／一九八二年七月)の一九五六年の項目には、「学生アルバイトの実収」として、「一番多いのは書籍などの運送、清涼飲料水、ビニール、各種機械の製造で日当三百円(交通費は含み)。次いでフスマ張り、ペンキ塗装で四百円以上(講習を終えた者)。(後略)とある。
- (34) 一九五五年六月に、それまでの黄銅貨から現行のアルミニウムによる一円硬貨が発行されている。

《大蔵省では、さき一般から公募した図案による新しい一円のアル

ミニウム貨幣を来月一日から発行することになった。これは目方一ダの純アルミで直径二〇ミ、さる廿八年末で一円黄銅貨は流通禁止になったので、一年半ぶりで一円の硬貨がお目見えするわけ。》(『朝日新聞』夕刊／一九五五年五月二十九日付)

- (35) 金時鐘『差別の醜と解放への道(上)』(注(27)に同じ)。また、『こんなんして生きてきたんやー成合における在日朝鮮人の生活史』(成合における在日朝鮮人の生活史)合同編集委員会編／在日朝鮮人サークルむぐげの会／一九八〇年三月)には、以下のよう

に記されている。

《一方、『ポロ、チャンサー』(ポロは、ぼろ布などのポロで、チャンサーは朝鮮語で商売の意。現在の廃品回収業)で、くいっないでいるところもありました。現在のように古紙中心に回収するのではなく、おもに鉄、銅、なまり等、金属類を中心に集めていたそうです。／しかし、のちにこのことが、大きな悲劇をもたらしました。／一九五〇年に、朝鮮戦争がぼつ発し、日本は国内で武器、弾薬をどんどん製造し韓国に売りつけ、大もうけをしました。日本は朝鮮戦争で死の商人となり、たった五年で第二次世界大戦後の混乱から立ち直って、さらにこれを契機に、その後急激な高度成長を遂げていくのです。朝鮮戦争で武器、弾薬を売って大もうけしたことを朝鮮特需と云い、朝鮮戦争のおこぼれは、当然成合の朝鮮人にも回ってきました。日本国内では、景気がよくなったものだから、まず道を整備したり、新しくつくったりして、家やらビルやら工場などを建てていきます。そのためには、まず碎石が必要で、碎石で働いている成合の朝鮮人を少しはうるおしました。又、武器をつくるのに鉄や鉛などがいられます。日本には、地下資源がほとんどないので、鉄くず、さびたクギなどが高く売れたのです。だから成合のポロチャンサーの人達は、生活のために、必死になって、鉄くずを拾い集めた

のです。／このことを鄭アジメは、／朝早よから、ユアサのゴミ捨て場のとこ行くね、鉛拾いに、顔や手やらまっ黒にして、子供うしろにおっぱして、ふんでもちよつとでも、よおけ拾うた時は、子供におかしの一つでも買おてやれるわけや。／この言葉の中には、生活の苦労だけにとどまらない、云いしれぬものが含まれているのを見ることが出来ます。／「ちよつとでも、よおけ拾うた時には、子供におかしの一つでも買おてやれるわけや」、成合の子供には、ちよつとよおけひろた鉄くすが、おかしの一つであったり、その日のおかずが少しよかつたりというふうに、よろこばしい方にかわつたのですが、その鉄くすが朝鮮の子供たちには、親兄弟を殺した鉄ぼうであったり、爆弾だつたのです。しかし、成合のポロチャンサーの人達は、そうなるを知りつつも、生活のために必死になつて、鉄くずを拾いに回らなければならなかつたのです。」

(36) 金時鐘「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」(注(23)に同じ)。

(37) 岩井克人は『貨幣論』において、「貨幣とは何か?」という、古代から人々を惑わしてきた難問に挑んでいる。岩井は、貨幣とは商品であるという貨幣商品説と、貨幣とは法律の創造物であるという貨幣法制説を、いずれも貨幣をめぐる「二大神話」として退ける。貨幣商品説も貨幣法制説も、「貨幣の背後に貨幣を貨幣たらしめる『何か』を想定しているという点」で、アポリアに陥っているからだ。これに対し岩井の眼目は、「貨幣にもし本質があるとしたならば、それは貨幣には本質がないということなのである。」(あとがき)という「木で鼻をくくつたような答え」にある。

(38) 岩井克人によれば、貨幣とは「共同体的な存在」である。これに対し、貨幣をただのモノとしてしか受け取ることができず、貨幣共同体の自明性を無惨にも打ち破いてしまう存在を「異邦人」と呼んで

いる。

(39) 鶴飼哲は、『化石の夏』(海風社／一九九八年)の出版を記念して企画されたシンポジウムにおいて、「……金時鐘さんの詩の作業の性格の一面を、あえて『時間の脱植民地化』という言葉で捉えてみたい」と提起し、その例のひとつとして「しやりっこ」を挙げている。鶴飼によれば、金時鐘は日本語で書く朝鮮人として、植民地主義という「強制された同時代性」と格闘せざるをえない。さらに金時鐘の場合、国際共産主義運動という反体制運動の側からも「同時代性」を強制されるという問題が重なるのだという。そのうえで、「強制されたこの同時代性から自分の時間をいかに解放していくか、そういう試みとして、この数十年間の詩業を読み直して見ることができると鶴飼は指摘している。「しやりっこ」においては、語り手の「妻」が便秘になり、その「四十年の便秘」が「化石」であると表現されている。鶴飼は「化石」という言葉の持つ含意に注目しつつ、「金時鐘さんの言葉は、こういう意味での石の言葉なんじゃないか。石に孕まれている時間を抱え込みつつ頭わにする、そういう言葉なんじゃないか。」と発言を結んでいる。(梁石日・鶴飼哲・瀧克則・細見和之「シンポジウム」言葉のある場所 金時鐘詩集『化石の夏』を読むために)(野口豊子編『金時鐘の詩もう一つの日本語』もず工房／二〇〇〇年四月)

(40) 呉世宗は、金時鐘に大きな影響を与えた小野十三郎と金時鐘の比較をとおして、以下のような指摘をしている。小野十三郎の「短歌的抒情の否定」とは、内面を拘束することで共同性を立ち上げ、結果的に場面を隠蔽してしまう日本の近代抒情詩を批判的に対象化する方法であった。それは、風景や対象を質的に異なる場所から、すなわち無限の遠点から射影する思想であった。これに対して金時鐘は、対象とあえて距離をとろうとする小野十三郎の思想を批判的に

ことを快諾してくださり、貴重なお話を聞かせてくださいました金時鐘先生に、心より御礼申し上げます。

(あさみ ようこ・本学大学院博士後期課程在学)

継承した。金時鐘は、「現実を隠蔽するように働く抒情に、距離を縮めて吞み込まれることなく、また距離を維持して傍観者に留まるでもなく批判するには、場を開示するだけでなく、その中に入り込み「自然」を奪回」しつつ『生きる』思想が必要だったのであり、金時鐘は小野十三郎の静力学を能動的なそれへと組み替えたのだという(呉世宗「第三章 小野十三郎と金時鐘」／『リズムと抒情の詩学—金時鐘と「短歌的抒情」の否定」／生活書院／二〇一〇年八月)。以上の方法論を確認したうえで呉世宗は作品分析を行い、『地平線』・『日本風土記』の時点では語り手と対象との距離が残されているが、『新潟』ではその方法論が確立されていると考察している(前掲「第四章 初期詩篇論—『長篇詩集 新潟』に至るまで」)。

【付記】

* 『日本風土記Ⅱ』収録予定作品の引用は初出誌に拠った。また、『新潟』・『猪飼野詩集』の引用は『集成詩集 原野の詩 1955〜1988』(立風書房／一九九一年一月)、『失くした季節』の引用は『失くした季節』(藤原書店／二〇一〇年二月)に拠った。また、『ヂンダレ』・『カリオン』の引用は、『復刻版ヂンダレ・カリオン』全三巻・別冊一(不二出版／二〇〇八年一月)に拠った。改行には「／」、行間が空けられている箇所には「／／」と記した。旧漢字は新字体に改め、仮名遣いはそのままとした。ルビや記号などは適宜省略した。

* この研究は、細見和之先生と筆者との共同研究の成果の一部である。重要なご指摘をくださいました細見先生に、心より御礼申し上げます。

『日本風土記Ⅱ』の復元にあたっては、野口豊子氏による詳細な年譜『金時鐘年譜』(『原野の詩』所収)に拠る所が大きかった。また、共同研究として復元作業に取り組む際、宇野田尚哉先生に貴重な資料をご提供いただいた。厚く御礼申し上げます。未刊行の詩集を引用する